

Jupiter

ジュピター

2023
秋号
VOL.52

岡山県精神科医療センター理念 | 人としての尊厳を第一に安心・安全の医療をめざします。



当センターのシンボルマークは
安心・安全の医療を表しています

ノアの方舟で主人公ノアがハトを放ち、オリーブの葉をくわえて船に戻ってきたところを表しています。安住の地を求めて、安心・安全の医療を追求し進んでいくことをシンボライズしています。

CONTENTS

2 国立療養所長島愛生園を
知っていますか？

3 P.N.Hisami Yamanoi
N-I-M-I 便り

4 東入院棟 季節の夏の会 盆踊り大会

4 岡山県精神科医療センター
向井潤医師が人命救助で表彰されました

5 日本精神障害者
リハビリテーション学会
第30回岡山大会

6 性暴力被害者対応看護師(SANE-J)
という資格をご存じですか？

7 制度の狭間にある社会課題に対応する
民間活動シリーズ vol.3
NPO法人
子どもシエルターモモ

8 EVENT REPORT
・東古松サント診療所 デイケア
・岡山県精神科医療センター デイケア

国立療養所長島愛生園を知っていますか？

令和5年12月に開催される、「日本精神障害者リハビリテーション学会第30回岡山大会」で長島愛生園とハンセン病の歴史について紹介します。その取材のため、「国立療養所 長島愛生園（瀬戸内市邑久町）」を訪ねました。長島愛生園歴史館の研究者・木下浩氏に協力いただき、資料や史料から学ぶと同時に、島内でも今も生活されている元患者さんの生活にも想いを馳せて来ました。

ハンセン病の歴史と長島愛生園

ハンセン病の歴史はとても長く、日本の文献で初めて登場するのは、「日本書紀」に遡ります。顔や手など人目に付く所に顕著な症状が出るため、古くから恐れられていました。中世では、この世に生まれる前に悪いことをした罰という意味で「天



隔離された患者さんが、海を渡り最初に降り立つ橋の跡。ここで親と別れる子どもも多くいたそう

刑病「業病」と呼ばれました。罹患者は忌み嫌われ、家を出て放浪したり、身を寄せ合って暮らしたりしていました。世界史を見ても、紀元前からハンセン病の存在が認められおり、中世ヨーロッパではペスト同様に恐れられていました。19世紀以降、植民地支配が進むアフリカ、アジアなどでハンセン病の救済と隔離を目的として、島や僻地に療養施設が造られました。明治期の日本にはハンセン病罹患者は数万人いたとされています。わずかな療養施設はありましたが、実際には多くの罹患者が地域や放浪の中に暮らし続け、厳しい差別を受けていました。

日本における隔離政策が進展したのは、1931年「らい予防法」からです。ハンセン病の根絶計画を元に制定され、全ての患者は強制的に療養所に収容できるという絶対隔離が始まりました。同じ年に日本は15年間に及ぶ日中戦争・太平洋戦争に突入しており、心身とも



島に隔離された患者さんが最初に収容される建物「回春寮」。当時の消毒風呂が現存する貴重な史料

患者さんの生活を知る

歴史館では、島全体が療養所だと分かる巨大なジオラマをはじめとして、生活用品、補助具、作業道具などが多く展示されています。療養とは名ばかりで、土木工事・家事・看護などを患者自身が担っていた過酷な生活が想像できます。ハンセン病の特徴である知覚麻痺により、作業中の怪我や痛みの発見・回復が遅れ、手足の壊死・切断に至った方も多かったそうです。また、所持金を取り上げられる、島外外出を禁止される、患者同士で結婚しても子どもを持つことを許されず中絶・不妊治療を強制される、死後は解剖されるなど、人権侵害も多くありました。

ただ、苦しみの中にも光を見出そうとする姿もたくさんありました。園内では芸術・スポーツ・政治・社会復帰への挑戦など多様な活動がありましたが、その背景は壮絶です。視



青天の瀬戸内海。島から出られない患者さんも海を見つめていたのでしょうか？

力も指の感覚も失った人が字を読むために、感覚が残る唇や舌で点字に触れる「舌読」のパネルを前にすると、言葉を失います。著名な作家でもあり、長島愛生園で実際に勤務されていた精神科医・神谷美恵子医師の著書「生きがいについて」を重ねて読むことで、この特異で痛みを伴う環境の中で人がどう精神的な充実を見出しているのかの不思議を感じることもできます。

現在の長島愛生園には、95名の元患者さんが生活されています。島内のカフェを訪れると、元患者さんが集い談笑されています。患者さんが渡ってきた海を目にし、盲導鈴代わりのスピーカーから流れるラジオを耳にすると、物言わぬ島が雄弁に語りかけてくるように感じます。是非一度、長島愛生園に足を運んでみてください。

PHN.Hisami Yamanoi NIIMI便り

今回は1981年から2年間と2000年から4年間、岡山県立岡山病院（現岡山県精神科医療センター）で保健師として過ごされ、県の保健所や岡山県庁でも精神保健分野でご活躍された新見公立大学看護学科准教授の山野尚美先生に、当時の様子や思い出を語っていただきました。

岡山県の保健師として39年、振り返ると、職場や地域の方々、先輩、後輩、患者さんやご家族など、多くの方々を支えられ多くの学びをいただきました。

岡山県立岡山病院とのつながり

1981年4月、岡山県の保健師として採用された新任地が、岡山県立岡山病院（現岡山県精神科医療センター）で、2年間過ごしました。その頃の入院棟は和室で暗く、複数の患者さんが一部屋で過ごすなど、決して快適な環境ではありませんでした。そのような中でも、看護師をはじめ医療スタッフの「患者さん中心の医療・看護」「家族へ寄り添う姿勢」から、患者さんやご家族への接し方や、退院後の生活の支援など学ぶことも多く、私の職業人生がスタートしました。

保健所勤務と本庁勤務から

1983年から保健所で母子保健の担当となり、中島洋子先生を嘱託医に小児精神発達相談（広汎性発達障害などの健診後の幼児の相談を県内で最初に始めた）とも思い出です。精神に障害のある方には自転車で家庭訪問に向き、対応困難なケースには、顔の見える関係だった病院の医師

や看護師長への相談に繋げることができました。その後、1997年からは、初めての岡山県庁勤務となり、ここでは介護保険制度の円滑な導入を図るため、業務山積の凄まじい業務量をこなす日々が続きました。

再び岡山県立岡山病院へ

2000年に病院勤務となり、新病院の建て替えに携わる機会がありました。その当時、中島院長や津尾先生、来住先生をはじめ、看護・コメディカルスタッフ・事務職が一丸となつて、日々熱い討論を重ねました。新しいものを私たちが創るという貴重な経験をさせていただきました。中でも思い出深いのは、新病院の屋根の色と診察室等の案内板の色の決定に時間を要したことでしょうか。数カ月やり直しの連続でした



2019年5月 厚生労働省宇都宮健康局長に全国保健師長会要請書提出(全国保健師長会HPより引用)

が、院長のゆるがない信念と熱い思いの下、無事に深緑色に決定されたときは安堵いたしました。また、閉鎖空間に「光、緑、風を取り入れること、入院棟の2階に広場を作り植栽することなど、言い尽くせないエピソードは山積です。さらには、院長の外来日は夜遅くまで診察が継続されていたり、来住先生は現在同様に風をなびかせ颯爽と歩かれ、外来にいたかと思うといつの間にか病棟におられましたね。医局・外来・薬局のメンバーの結束力は強く、4年間のここでの出会いは生涯の宝物となりました。

そして今、出会った方々に感謝の日々

その後は岡山県庁の保健師統括や健康推進を図る部署で勤務し、いろいろな方との出会いがあり、新病院建築の応援団となってくれた事務職もいました。子どもの心の診療拠点事



(上)2022年12月 銀山温泉 (下)愛犬ボンタ

業の導入、災害時の心のケアの体制構築、西日本豪雨災害時の対応や新型コロナウイルス感染症対策など、困ったときの来住先生へのコールで、行政と連携が図れたこともたくさんあります。退職後は、看護師や保健師を目指す学生に、精神科看護はすべての領域の基礎であることや楽しさを感じてもらえるよう教鞭をとらせていただいています。「働くときは働き、休む時はしっかり休む」をモットーに、愛犬「ボンタ」と夫のキャンピングカーに乗って、全国各地の温泉巡りを楽しんでいきます。

最後に、職員の皆様、患者さん、断酒会や関係機関の方々の活動される姿から幅広い視野や思考の学びをいただきました。現在の私があるのも、多くの方々に支えられたと実感しており、皆様一言では言い尽くせないほどの感謝の気持ちです。

日本精神障害者リハビリテーション学会 第30回 岡山大会

来る2023年12月2日(土)・3日(日)の2日間、「日本精神障害者リハビリテーション学会第30回岡山大会」を倉敷市芸文館にて開催いたします。今回は3年ぶりに現地のみの開催といたします。皆さまと対面でお会いし親睦を深めるといふ、そのことだけでも、暗い世の中的一条の光となってもらえたらと切に願う次第です。

どうぞ、皆さまにおかれましては、会員非会員問わず奮ってご参加いただき、倉敷でお目にかかれまことを主催者一同心より願っております。

——— 大会長 山田 了士氏 (岡山県精神科医療センター副理事長)



問い直す

リハビリテーションを

暮らしのための

会 期
2023年
12月2日(土)・3日(日)

会 場
倉敷市芸文館
(倉敷市中央1-18-1)

大会長 山田 了士氏 (岡山県精神科医療センター 副理事長)
副大会長 武田 俊彦氏 (公益財団法人慈主会 慈主病院 院長)
小林 隆司氏 (兵庫医科大学リハビリテーション学部 作業療法学会 教授)
進藤 貴子氏 (川崎医療福祉大学 臨床心理学科 教授)
実行委員長 来住 由樹氏 (岡山県精神科医療センター 院長)

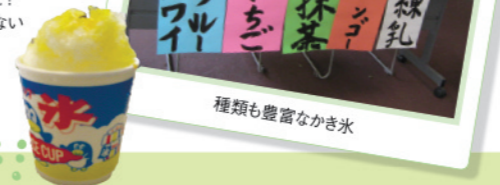
大会プログラム <https://med-gakkai.jp/30japr/pro/>



■主催事務局/地方独立行政法人 岡山県精神科医療センター 〒700-0915 岡山市北区鹿田本町3-16 Tel.086-225-3821
■運営事務局/株式会社メッド 〒701-0114 倉敷市松島1075-3 Tel.086-463-5344 Fax.086-463-5345 Email 30japr@med-gakkai.org



(上) 屋台の雰囲気をご存分に味わっていただきました!
(下) 盆踊りには欠かせない大太鼓



季節の夏の会 盆踊り大会

東入院棟

8月9日、東(司法精神)入院棟で「盆踊り大会」が開催されました。当日はかき氷(マンゴー味が大人気でした!)や花火の動画も上映され、暑い夏がぶっ飛ばす楽しいイベントとなりました。毎週ユニットミーティング後に話し合いを重ね、企画から運営まで患者さん主体で、コツコツと計画を進めていきました。

当日は盆踊りの輪の中心に大太鼓を置き、その力強いリズムとともに、毎朝練習をしてきた「東京音頭」「炭坑節」を踊りました。盆踊りらしく浴衣姿や法被姿と目を引く普段とは違った風景で、涼やかな風鈴の音色、天井には盆提灯の飾り、それぞれに工夫を凝らして作った面をつけ、手にはうちわ、「これぞ日本の夏!!」。

特にその中で日頃では見られないほどの患者さんの輝く満面の笑顔が印象的で、患者さん、スタッフ共に一体となって夏を満喫できた一日でした。次は季節の冬の会を開催する予定です。
(東入院棟・季節の会)



当センターの医師・向井潤先生が、大阪市北区において人命救助を行い、傷病者の救護に貢献したということで、大阪市北消防署長より感謝状が贈呈されました。
向井先生、おめでとうございます。



NPO法人 子どもシェルターモモ



(左より)黒岡精神保健福祉士と子どもシェルターモモ副理事長西崎さん

個人の生き方や家族の在り方が多様化しています。既存のサービスでは解決できない課題を抱えた患者さんに出会う時、民間団体の支援に救われることが増えています。今回は、虐待や暴力で傷ついた子どもを支援する「子どもシェルターモモ」の活動を紹介します。

子どもは宝、子どもは未来

NPO法人 子どもシェルターモモ 副理事長 西崎 宏美さん

子どもの活動を50年

黒岡 多様なNPO活動の中でも、子どもの命を守る活動は特別だと思えます。原動力を教えてください。

西崎 私、約50年前に「子ども劇場」の設立に携わり、以来ずっと子どもに関する活動をしています。当時は法人格の無い任意団体でしたが、1998年NPO法人制度の施行により、社会的信用を得て活動できるようになったのは嬉しかったです。子どもシェルターとの出会いは、2008年に参加した岡山弁護士会の勉強会でした。当時、児童虐待の増加は社会問題だったので、岡山にも子どもシェルターを作ろうという声が上がりました。その場で設立委員会が発足、翌年にはNPO法人子どもシェルターモモが誕生したのです。

傷ついた子どもの心に寄り添う

黒岡 傷ついた子どもに向き合う支援は、試行錯誤の連続だったのではないのでしょうか？

西崎 実は、大切なことは全て子どもに教わりました。ある女の子は、シェルターに入っても、物を壊す、味噌汁を投げるなどの行動が続きました。話し合おうとすると「みんな私のことが憎いんだ、ポコポコにすればいい」と興奮して言うのです。親から暴力を受け

続け、全ての大人が自分を憎んでいると思ひ込んでいました。だから私達の前でも、恐怖や怒りに駆られて、行動が止まらなかつたのでしよう。私は「あなたが愛おしい」と言い、彼女に「愛」の字を書いて見せ、意味を伝えました。それから少しずつ、彼女は甘えてくれるようになりました。赤ちゃん返りをして泣き叫んでもいい、ありのままの姿で愛してもらいう経験、それが「モモ」の最初の役割だと思っています。

子どもが成長しても、つながりは続く

黒岡 子どもたちが自分を守る厚い壁を手放して心を開く。そこから支援のスタートなんです。西崎 大切なのは子どもの未来

です。モモを出た子どもたちにとって、一人暮らしをしながら働くことは容易ではありません。家族と疎遠で、頼れる大人も少ない彼らの拠り所になるためアフターフォローの活動も行っています。どんなに過酷な環境にいた子どもでも、せめてモモにいた楽しいことや可愛がってもらったことを経験してほしい。そうすれば、苦難にあつても立ち上がる事ができると信じています。

NPO法人 子どもシェルターモモ

岡山市北区清輝橋1-2-9 TEL・FAX.086-206-2423

子どもシェルターモモとは…困難を抱える子どもたちのための「セーフティネット」です。

HP



Facebook



利用の流れ

支援を必要としている子どもから相談を受けた大人・機関

子どもシェルターモモ事務局

子どもと面接して利用が可能か検討し、子どもの意志を確認します。

「子ども担当弁護士」決定

岡山弁護士会子どもの権利委員会の支援を受けて決定します。

子どもシェルターモモの家
(女子用/定員5名)

「今すぐ助けてほしい」という子どものための緊急避難所。衣食住が保障され、子どもたちが安心して気力を回復させる場所です。

自立援助ホーム「学南ホーム」「あてんぼ」
(学南ホーム…男子用/定員6名)
(あてんぼ…女子用/定員6名)

15~20歳までの子どもの自立を、常勤スタッフが生活を共にしつつ支えます。滞在期間のうちに家事などの方法を学び、社会に出て行くための準備を進めます。

アフターケア相談所(えん)

子どもシェルターや自立援助ホーム、児童養護施設から社会に出た子どもたちが、つまづいても再チャレンジできるように、学習支援・就労支援・入居生活などのサポートを行います。

皆様、今年の7月に性犯罪の刑法改正があったことをご存じでしょうか。日本の性犯罪の刑法改正は2017年に続き6年ぶりの改正になりますが、その前は明治40年であり110年の間、改正がなされなかった歴史があります。今回の改正では、性行為の同意年齢が13歳から16歳に引き上げられたこと、同意のない性行為のすべてが犯罪になることが改正の大きなところになります。わかりやすくいうと、「16歳以上ではお互いの積極的な同意がない性行為は犯罪になる」ということです。

昨今、子供のころの虐待や性被害の影響などからPTSD(心的外傷後ストレス障害)の症状が起き、外出がしにくい、人に関わるのが怖いなどの生活のしづらさや、眠れない、気分が落ち込むなどの精神的な不安定さを感じ精神科に相談に来られる方が多くおられます。性虐待や性被害は欧米では



コメディカルへの講義。職種ごとにスケジュールを組んで理解を広める活動を行っています

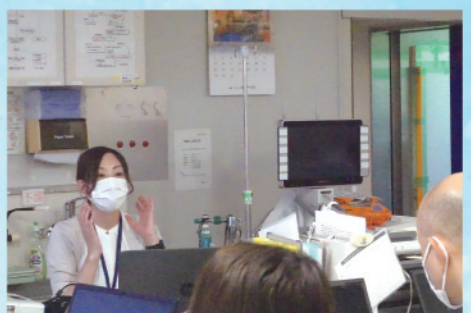
「魂の殺人」とも呼ばれ、被害者に大きな傷がつき、傷とともに生きていくことを余儀なくされることとなります。そのため、私たちは性行為の同意とはどういうものか、いつ、どこで誰と性関係を持つのか決める権利(性的自己決定権)があることを知っておく必要があります。それが自身が加害者にも被害者にもならず済むことにつながります。また、性被害に遭った時はどこに相談したらいいかなどを知っておくことで、万が一被害に遭った場合でも心の傷が深くなる前に適切なサポートやケアを受けることができます。私は心に傷を抱えられた方を理解し、関わりの一助としていと考え、昨年から研修を受講し今年9月、フォレンジック看護学会認定資格の「性暴力被害

相談窓口
性暴力被害者支援センター
おかもやま心
http://okayamakokoro.jp/

電話相談無料
TEL.086-206-7511

#8891 (はやくワンストップ)
※24時間つながります
(夜間休日は国のコールセンター対応)

取得後は正しい性教育の普及や、虐待や性被害に遭いどうしていいかわからない方に正しく対応できる人材を育成するため、院内外で研修等の活動をさせていいただいています。「誰もが安心して自分らしく生活できる社会の実現」に向けて微力ではありますが、邁進していきたくと思っています。



病棟での講義

Sexual Assault Nurse Examiner-Japan

性暴力被害者対応看護師(SANE-J)という資格をご存じですか？

一人でも多くの被害者をサポートしたい

精神科認定看護師 中井 志穂



EVENT REPORT



東古松サント診療所
デイケア
リラククスタイム



アロハノアフラダンスチームによる華麗なフラダンス



夢や希望を付箋に書き、みんなで共有



酷暑にはかき氷がピッタリ



陳式太極拳を体験

酷暑の中行われた夏祭りでは、岡山市のボランティア団体「アロハノアフラダンスチーム」にフラダンスを披露して頂きました。ダンスに合わせてマラカスを鳴らしたり合唱をしたり、簡単な振り付けを教えて頂き一緒に踊りました。踊り手の方々の華やかな衣装に太陽のような笑顔、さざ波のようなしなやかでゆったりとした動きに、皆うつと。終了後はかき氷を食べて、南国にいるかのようなリゾート気分を満喫しました。

7・8月はピアセンタークローバーの方による「WRAP講座」を開催しました。WRAPは「元氣回復行動プラン」といって、人生の目標や夢、満足感を持ちながら自分なりの人生を築き上げていくためのプランです。グループワークでは、自分が抱えている夢や希望、体験について語り合いました。参加された利用者さんからは「同じ悩みを感じることがあるんだな」と思った、「夢を聞いて元気をもらえた」と共感の声が多くありました。

8月は2度「太極拳講座」を開催し、日本カンファ武術協会の奥西講師に陳式太極拳を教えて頂きました。普段意識しない呼吸に目を向けながら、ゆったりと流れる時間に身を任せて過ごすことができました。



岡山県精神科医療センター
デイケア
夏から秋へ



カーリングの室内版であるカローリング



LITALICOワークスさんによる出前講座

夏には涼しく感じていた風も、肌寒く感じるようになってきましたね。当センターのデイケアは、毎月「出前講座」を行っています。就労移行支援事業所の方や実際に就労されている方から話を伺えると、参加者はメモを取ったり、質問をしたりと、非常に興味深い様子で参加していました。

今回はデイケアで行ったレクリエーションを紹介し「まず8月末の「夏祭り」。どんなお店を出店するか、飾り付けをどうするかなど、利用者の方々と相談



意外と難しい輪投げ



大人になっても楽しめる風船バレー

しました。当日はかき氷、スーパースポーツ、射的が出店。利用者の方と一緒に楽しく回ることができました。また、各部署のスタッフも来てくださり、お祭りを盛り上げてくれました。

9月は、「室内スポーツ大会」を行いました。ポッチャ・カローリング・バスケット・ピンポン・風船バレーなど、初めて実施するスポーツばかりではありましたが、力加減などを工夫しながら楽しく競技をすることができました。スポーツ観戦を楽しむ方もおられました。

Jupiter

2023年
秋号
VOL.52

2023年10月31日発行

発行人 中島 豊爾
編集人 来住 由樹
発行所 地方独立行政法人 岡山県精神科医療センター
岡山市北区鹿田本町3-16
TEL.086-225-3821(代)

ホームページ <https://www.popmc.jp>
制作協力 株式会社 友野印刷機
印刷所 友野印刷機



編集後記

今年に残暑が厳しく、10月からの衣替えが辛かったのですが、ようやく涼しくなってきました。今年の夏の暑さは異常でした。今後の気候変動が心配でした。その気候変動に伴うトピックスをひとつご紹介いたします。

皆さんはコーヒーの2050年問題をご存じでしょうか。なんでも、豊かな香りで日本人に大人気のアラビカ種のコーヒーを栽培できる地域が、2050年には気候変動によって半減し、コーヒー生産量が大幅に減るといわれています。日本のコーヒー消費量は世界第3位。そのコーヒー豆輸入量の7割がアラビカ種です。何を隠そう私もコーヒー愛好家の一人。毎日欠かさず飲んでいるので、個人的にも危機を感じています。夏の猛暑のせいで地球温暖化の弊害が身近に感じられるようになり、温暖化対策を本気で考えなければいけない、と感じています。まずはマイタンブラーを持参することから始めようと思います。

(事務部・志茂香代子)